

札幌出身・上田健司 ピアノアルバム発売

創造への思いシンプルに

札幌出身のミュージシャン、音楽プロデューサーの上田健司がピアノアルバム「hakken kokken ueken」(ウエスレコース)を発売した。知人の芸術家、村上周の個展会場で流して高く評価された音源を収録。頭でイメージしたまま静かに奏でるメロディーは、村上の世界と溶け合った。

(大野日出明)

個展「Original Mix」は昨年10月、東京都内のギャラリーで開かれた。風景やポートレートといった写真をベースとしたカラージュ作品が会場に並んだ。

個展の前から、上田が主催するイベントなどでコラボレーションを重ねてきた2人。上田は「村上君が戦場や国境の紛争地帯で写真を撮って作るものすごい興味があって、時代と向き合うという点で、自分の音楽に共通するジャーナリズムを感じる」という。

今回のアルバムは、個展のために書き下ろした12曲で構成。1分に満たない曲もある。曲名は「ukn01」「ukn02」と続くため、ほぼ無題と同じだ。そして、驚くほどシンプルな音を奏でる。

芸術家・村上周とコラボ

「時代と向き合う共通点」

村上周がジャケットのデザインを手掛けたアルバム「hakken kokken ueken」



個展に向けて2人で話し合う中で、表現手段としてピアノを選んだ。村上が「今は黒の色しか頭にイメージできない」との悩みを一時期抱えていたことや、真っ白なものに自分で色付けしていく本来の創造的な作業とが、頭の中でピアノの白鍵、黒鍵と結びついたという。「僕はピアノストではないが、この一つの音色にした理由があったんだと思う」と振り返る。

上田は「KENZI&THE RIPS」[the pillows]とつたバンドのベース奏者を経て、小泉今日子やPUFFYらの音楽プロデューサーを手掛けてきた。札幌と東京を行き来する多忙な生活だ。今回はソロ活動の一環で、「村上君の影響で、僕もいろいろと新しい試みがあった」と喜ぶ。

現在、収録曲を素材として弦楽三重奏に練り直し、自身がタクトを振るイベントを行っている。

「個展の相談を受けるうちにピアノの音が頭の中で聞こえてきた」と語る上田健司

